

## 日頃の教育に対する工夫、及び今後の教育への抱負

建築・都市環境工学科 山田 岳晴

学生の皆さん、優秀教員称号「THE TEACHER OF THE YEAR」に選出いただき、ありがとうございます。この表彰に値する、学生に伝わる教育を目指していますので、大変光栄です。

理数系の工学部、そして建築学を構成する中で特殊と思われがちなのが、歴史、民俗、芸術、文化などの文系に広く関わりを持つ、私の専門とする日本建築史です。しかしながら、建築学の分野では、建築史（建築デザインの変遷を知ること）は、これまでも、これからも、人と関わる建築の基本とされる世界共通の学問分野です。

自身の思っていることが相手に正しく伝わること＝理解してもらうこと、これが言葉という技術の使い方だと思っています。授業でも、わかりやすさ→理解→興味→自ら研究→新しい発見と、まずは建築史の分野のファンになってもらうことを期待しています。

「建築史」の授業では、日常生活では使わない建築名や部材名が登場します。授業では、これらを「覚えなくてよい」と伝えています。学生時代の私も暗記していなかったですし、社会に出たら、将来の予測も含めてわからないことだらけが当たり前で、調べたらわかることは、調べればよいと思っているからです。用語はその道の専門家となれば、繰り返し触れることになり、否が応でも覚えてしまいます。それよりも、未知の建築と出会ったときに、いつの時代のものかを含め、それがどんな価値があるか評価できる、そんな人になってほしいと思っています。授業の仕掛けとして、毎年、学生に好評なのは一言カードです。授業おわりに毎回、感想でも、質問でも、何でも一言書いてもらっています。それに口頭で次の授業で応答しています。いわゆる反転授業の簡易版でしょうか。また、あえて授業資料をプリント（今年度はPDF）で配付しています。パワーポイントは、見たときは理解した気になりますが、より深く見てみたいという欲求には応えられていないような気がするからです。また、将来を含めた復習にも役立つと感じています。

リアルタイムの口頭授業と、これらを組み合わせて、学生の反応を見ながら柔軟に、最新の情報の提供も含めて進めてきましたが、本年度は、コロナ対策のため、前期はオンライン、後期もオンライン中心の教育環境となりました。この状況を悲観的に捉えるのではなく、劇的に変化した社会環境を活かして、学生とともにこの状況に飛び込み、楽しむという方針で進めました。その一環として、できるかどうか確信はありませんでしたが、これまでの教室授業では不可能な、現地からの伝統建築の中継解説も実施しました。

共通教育科目の「モノから読み解く文化財学」では、教室容量による人数制限がオンラインにはないことを活かし、170人の学生と授業を行いました。オンライン環境でもグル

ープワークができるかどうか、学生に5人ずつのグループに分かれてもらい、それぞれにMeet 会議室とグループ共通フォルダを提供し、ある意味、実験的に演習を実施しました。学生さん達は、さすがオンラインには強いようで、興味を持って対応してくれました。

3年生助言教員が担当する「PBL」では、JABEE との関係から協働ワークが課題となっていましたので、同じ要領でオンラインでのグループワークを実施しました。そのころには、学生と教員がお互いに状況が見えないというオンラインの弱点も見えてきており、学生にあまり負荷を掛けないことを念頭に、PDCA ペーパー（小学校で話題となりつつある「けテぶれシート」）を使った、自ら学びを進める方法を導入してみました。また、一般社会での適材適所の人材配置に倣い、協働ワークでも、お互いに特性を活かして「現代社会の建築建設の課題」の発表をしてもらいました。さらに、学生に発表進行・質問者・タイムキーパーなども任せ、運営側の経験もしてもらいました。その時に運営側の演習経験は、就職すれば当たり前になることを説明しました。

様々な教育方法が実践されていることが、大学教育のおもしろいところで醍醐味だと思っています。これは、多様性や変化のある現代社会へと繋がる貴重な学生の経験になると感じています。

学問分野の特性もあり、私の方法がすべての分野で活用できるとは思いません。ただ、学生が好きで、学問を愛していることは共通すると思います。私の場合は、大学入学までに触れることのほとんどない、建築史について、授業でどれだけ理解してもらえるか、いろいろな方法を試して、教員の技術を磨いていきたいと思っています。常識として受け流していることは本当かどうか、疑いを持って研究することも重要で、教員と異なった提案もしてくれるような学生を育てたいと思います。授業で学んだことが将来のどのような場面に繋がっていくのかを伝えて関心を持ってもらい、研究の楽しさがわかる教育に今後とも邁進したいと思っています。